

水曜通信 18

2018年
12月

東北学院大学研究ブランディング事業通信
「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」

第18回水曜礼拝（公開大学礼拝） 2018年12月19日（水） 18:30-19:00



説教：長島 慎二（本学准教授）
奏楽：小野 なおみ（本学礼拝オルガニスト）

<礼拝次第>

前 奏：J.マンズフィールド

「一輪のバラ咲き出でて」

讃美歌：39番「日くれて四方はくらく」

聖 書：マタイによる福音書 25章31-40節

讃美歌：100番「生けるもの凡て」

説 教：「小さい者の一人」

祈 禱

頌 栄：544番「あまつみたみも」

後 奏：J.ブヴァール「ブレス地方のノエル」

後奏の後、30分間のグリークラブ・キャロラズ・東北学院宗教部聖歌隊の合唱による讃美を行います。

次回第19回水曜礼拝は **1月16日**です。

第17回水曜礼拝報告（説教：阿久戸 義愛、奏楽：小野 なおみ）

2018年11月21日(水) 18:30-19:00

讃美歌：262番「十字架のもとぞ」
聖書：マタイによる福音書 18章12-14節
讃美歌：讃美歌21 200番「ちいさいひつじが」
説教：「神に見いだされてある」
頌栄：544番「あまつみたみも」



【説教要旨】

神様は、私たちを、羊たちを、常に既に見つけ出してくださっています。呼びかけていてくれます。「私はあなたを見いだしている。あなたの傍にいます。だから、生きなさい！あなたの与えられた生を生きなさい！」その声に見いだされて、私たちの命は輝くのです。私たちの命は、この世界を照らす光であり、この地に味を、生きる意味を与えてくれる、地の塩です。たとえその命がどんなに短く燃え尽きるとしても、その光は決して失われることなく、今も人々と世界を、なお照らし続けるのです。そのような羊飼いの声に支えられ、励まされ、導かれつつ、神に見いだされて、地の塩・世の光としてある、そのような私たちでいたいと思います。（阿久戸義愛）

礼拝とその後の19時00分から30分までの小野なおみ氏のオルガン演奏による讃美に82名の市民が参加されました。

礼拝後の小野なおみ氏のオルガン演奏による讃美

S.フェレッティ(1817-1874)「ちいさいひつじが」編曲：加藤 牧菜 訳詞：堀内 敬三
J.S.バッハ「我ら悩みの極みにあり」BWV541
J.S.バッハ「幻想曲とフーガト短調」BWV542

19世紀後半にイギリスで成立した「ちいさいひつじが」は、日本では主にこどもたちが歌う讃美歌として長く愛されています。先月は聖歌隊の大橋奈々さんのソプラノ独唱と、10月の水曜礼拝でも演奏して下さった曾根レイさんのリコーダーと共に演奏しました。「我ら悩みの極みにありて」は、バッハによる「オルガン小曲集」の有名な1曲であり、讃美歌21に原曲となる讃美歌が収められています。苦難のきわみにあって神の慰めにすべてをゆだねる信仰が歌われています。「幻想曲とフーガト短調」はバッハのみならずあらゆるオルガン作品を代表する傑作の一つであり、半音階書法を駆使した幻想曲がとても印象的です。

(小野なおみ)

私は普段は聖歌隊の一員として、礼拝で讃美歌を歌わせていただくことがある



のですが、今回のような独唱をさせていただくのは初めての機会でした。今回の礼拝は、全体を通して一体感があり、なんともいえない特別な雰囲気がありました。そのような雰囲気の中、少々緊張はありましたが、曲の情景やあなたたかさを思い浮かべながら歌うことができました。沢山の方々と素敵な時間を共にすることができ、貴重な体験となりました。（経済学科3年 大橋奈々）

“FAITHFUL UNTO DEATH” (1)

「金子謹三の墓」



“FAITHFUL UNTO DEATH” (死に至るまで忠信) と刻まれています。この金子は「彼は死んだが、信仰によって今もなお語っている」(ヘブル11:4) 存在として、その後、東北学院に多大な貢献をすることになります。(続く)

(東北学院史資料センター 日野哲)

研究ブランディング事業公開講演会

「聖トマス～イエズス会～ヒンドゥー原理主義 — 南インドにおけるキリスト教ミッションの歩みと現在 —」開催

11月10日(土) 午後3時半よりホーイ記念館ホールにおいて、東北学院大学研究ブランディング事業公開講演会「聖トマス～イエズス会～ヒンドゥー原理主義」が開催されました。東北大学大学院国際文化研究科教授の山下博司先生が、南インドにおける古代から現代までのキリスト教宣教に関する講演を行いました。まず古代インドにおける聖トマスの布教伝説が紹介され、次いで大航海時代以降のイエズス会やプロテスタントミッションの宣教活動が説明されました。宣教師が改宗を進めるため在地のヒンドゥー社会への適合を進めたタミル語文化の発展に大きく寄与した点から両文化の混交や交流が近世インドで進展していたことが指摘されました。最後に、現代インドでヒンドゥー原理主義の下で排外的な傾向が強まっている現状が紹介されました。(杵淵文夫)



— ランカスター神学校での発見（3） —

「宣教師との協力伝道」



東北学院神学部卒業生総数185名のうち実に約70%が、まず東北地方で伝道者としての歩みを始めています。そして彼らの働きに協力するためにアメリカのドイツ改革派教会から派遣された宣教師は1920年代までに100名を超えています。これらの宣教師の活動を記録した多数の文書や写真も整理・保存されています。



上は「ノッスの会津伝道」として知られる写真ですが、徒歩での200マイル巡回伝道中に撮影されたもので、わらじ履きの日本人3名の名前も裏書きされていました。下は今回初めて入手した写真で、100マイル福島巡回伝道中に高田で1925年に撮影されたものです。地下足袋を履く神学部卒業生の田口泰輔(左)や齋藤一(その右隣)、壊れた靴底をひもで結んでいるヌーゼント宣教師、そして下駄の材料をきれいに積み上げたタワーが印象的です。(東北学院史資料センター 日野哲)

協賛講演会の開催報告

「ロマネスクからゴシックへ — 見えない神から見える神へ —」

11月24日(土) 押川記念ホールにて13時30分より開催し、まずキリスト教文化研究所所長の川島堅二教授より講師紹介があり、鐸木道剛教授が、被造物として世界が「もの」であること、その「もの」が神の受肉によって聖化され、しかもそれによって神が見えるものとなったことを説明した(40分)。ついで清泉女子大学の坂田奈々絵講師が、ゴシックのイデオログであるとしてきた12世紀パリのサン・ドニ修道院の院長であったシュジェールについて、その事蹟と著作を紹介し、そのテキストにおける光の用語をしばしばその影響元として取り上げられる擬ディオニシオス文書と比較分析し、シュジェールの思想が新プラトン主義とは異なり、受肉論をもとに物質的多様性を追求するものであることを明らかにし、感銘を与えた(90分)。講演の後には、幻視について、また光を意味するふたつの単語について質問やコメントなどが寄せられ、予定通り16時に散会した。40名の一般市民の参加があった。(鐸木道剛)



文部科学省私立大学研究ブランディング事業とは：

学長のリーダーシップの下、大学の特徴ある研究を基盤として、全学的な独自色を大きく打ち出す取り組みを行う私立大学に対し、施設費・装置費・設備費と経常費を一体的に支援するもので、各大学の特色化・機能強化の促進を目的としています。東北学院大学は、「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」との事業名で平成28年11月22日に採択されました。

東北学院大学研究ブランディング事業通信
第18号

2018年12月7日発行

〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1

TEL：022-264-6547

E-mail：branding@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

URL：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/theology/